

## 第 29 回国際軍事史学会大会参加報告

相 澤 淳

2003 (平成 15 年) 年度の第 29 回国際軍事史学会大会は、8 月 10 日から 15 日までの間「戦争、軍事とメディア ; 17 世紀から今日まで」を共通テーマとして、ルーマニアの首都ブカレスト中心街にある The Palace of the National Military Center を会場に開催された。今年度大会の参加国は、ヨーロッパを中心に 25 カ国におよび、報告者は延べ 50 余名にのぼった。

大会の運営は、ルーマニア国防軍事史研究所の全面的支援の下に行われ、同研究所所長の M. E. イオネスク准将はそのすべての行事に参加してホスト役を遺憾なく発揮していた。また、歓迎行事や支援業務などは、ほぼ軍の全面的協力によって行われ、軍と軍事史研究の密接な関係が感じられた。大会 4 日目のエクスカーション (見学) はルーマニア陸軍山岳部隊の訓練展示やブカレスト郊外の史跡見学が行われ、さらに、軍事博物館の見学や国防省での軍楽隊の演奏会などが研究会実施日の夜に行われており、まさに昼夜を問わない充実した大会 6 日間であった。

研究報告は、大会 2 日目の 11 日から、12 日、14 日そして 15 日の 4 日間にかけて、午前、午後を通して 2 つの会場に分け行われた。第 1 会場 (トラック 1)、第 2 会場 (トラック 2) とともに、ほぼ共通テーマである「戦争、軍事とメディア」に即した発表が行われたが、とくに各セッションのサブ・テーマは示されることなく、各セッションは 3 ~ 4 人の報告とそれに対する質疑応答という形で進められた。日本からの発表としては、3 日目 (12 日) に当研究所の林 永戦史部長による「最近の日本における軍事史研究動向」および亜細亜大学の東中野修道教授による戦争宣伝としての『南京大虐殺』、5 日目 (14 日) に筆者による「大本営発表とミッドウェー海戦」(後掲) があり、また最終日 (15 日) には、林戦史部長が午前第 1 会場の議長を務めた。

大会の日程は下記の通りである。

8 月 10 日 (日)

受付

各種委員会

ウェルカム・レセプション

8 月 11 日 (月)

開会行事

トラック 1 (3 セッション、9 名報告)

トラック 2 (1 セッション、3 名報告)

8 月 12 日 (火)

トラック 1 (4 セッション、12 名報告)

トラック 2 (4 セッション、11 名報告)

8 月 13 日 (水)

エクスカーション

8 月 14 日 (木)

トラック 1 (3 セッション、10 名報告)

トラック 2 (1 セッション、討論)

8 月 15 日 (金)

トラック 1 (2 セッション、6 名報告)

閉会行事

フェアウェル・ディナー

各報告は、それぞれ発表国の歴史上の戦争および軍事の問題とメディアとの関係を述べたものが主で、全体を通して 17 世紀から今日までのこの問題の全体像を把握するよう意図されていたと思われる。そうした中で、11 日午前の最初のセッションが、言わば基調報告的なセッションであり、その中の報告の一つがイギリスの Dr. Stephen Badsey による「西洋における戦争様式とメディアー 1792 ~ 1975 ー」であった。その内容を要約すると以下の通りである。

1792 年から 1975 年の間、すでにナポレオン時代には新聞と共に戦争に影響を与える従軍記者が出現していたが、このニュース・メディアが西洋の軍事問題においてずっと主要な位置を占めていたわけではなく、その重要な役割は 1850 年代以降の戦争遂行においてであった。しかしながら、この新たに重要となった戦争報道は、クラウゼヴィッツやジョミニのような古典的な軍事思想家に影響を与えることはなかった。その後、軍事プロフェッショナルリズムが確立し、また、戦争遂行によって軍事への関わりを深めた文民エリートがメディアとの関係を増すにつれて、20 世紀になると戦争報道の政治による取り込みが実践された。とくに最高レベルの戦争指導におけるこの動きに対し、軍事理論側は、それが高度に政治的なものであったため無視しつづけた。1870 年代以降西洋の軍事機構および思想などの研究はドイツの圧倒的な影響下にあったが、この軍事・メディアの問題は、主にアングロ・アメリカ社会において論じられていた。この理論と実際の

典型的な分裂は、戦争遂行時の軍事・メディア間に実在していた協調関係を覆い隠してきた。メディアは1970年代に至るも軍事理論側に無視され続けたが、一方この時にはすでにこの軍事・メディア間の協調関係も崩れ出していた。

11日の午後以降は、各国のケース・スタディー的な報告が次々となされたが、その中でも12日午前（第2会場）の東中野教授（亜細亜大学）の報告「戦争宣伝としての『南京大虐殺』」は、アジアからの参加が日本だけだったという意味からも、また、南京事件という欧米社会との関係上もかなりセンシティブな問題を扱ったという点からも注目できるものであったと思われる。この報告で東中野教授は、「中国国民党政府が宣伝戦のために作った部局である中央情報部が、情報操作として南京大虐殺を作り上げていった」ということについて、当時の中央情報部が作成した文書を提示しつつ結論付けた。発表時間が20分と限られており、また提示した文書が欧米人の読めないものでもあり会場からの反応も冷ややかであった。質問も「それでは南京における虐殺は全然なかったのか」という all or nothing 的なもので、それに対する答えも時間の関係上十分なされていたとは思われない。ただし、この質疑を通して欧米社会ではこの南京大虐殺が実証的な研究がないままに定説化されていることが実感され、やはり、こうした戦争に関する欧米社会の日本に対する様々な先入観を解くためにも、日本からの発信の重要性が痛感された。

この他に、戦後・現代的な問題に焦点を当てた研究報告としては、Dr. William Hammond「ベトナム報道－戦争における軍とメディア」（11日午後）、Dr. Bernard Cook「アメリカの報道とロシア・チェチェン紛争」（12日午後）、Dr. Bernadette C. M. Kester「国連平和維持活動時の報道規制－オランダの場合 / UNIFIL 1979-1985」（15日午前）などもあり、まさに研究報告全体を通して過去から現代までの軍事とメディアの関係についてさまざまな問題を考えさせられる4日間であった。現在、湾岸戦争やイラク戦争を見るまでもなく、軍事・戦争とメディアの関係は国際政治の動向を決定付ける重要な要因となっている。国際軍事史学会における今回の諸研究報告は、今後の国際軍事情勢を考える上でも、そのケース・スタディーとして様々な含蓄を持った報告であった。

なお、来年度の第30回大会は、モロッコで「戦争の経済的側面」を共通テーマに開催されるが、各国の軍事史研究者との交流の場として、また防衛研究所からの軍事史研究発信の場として、今後とも同大会への参加は有意義なものと思われる。

（防衛研究所戦史部主任研究官）